# ぼくたちの逃避行

招木かざ

ぼく、沙川まことはいわゆる、霊感少年だ。
死んで、未練やら恨みやら、何かしらの感情を残し、生きている人間の世界に留まり続けている、幽霊が見える。
幼い頃は、自分が見ている存在が、生きているとか死んでいるとか、良いとか悪いとかの区別がつかなかった。普通に「あそこに女の人がいる」とか「コンビニの前の道路に、顔の赤いおじさんがずーっと立っている」とか、両親や友達やらに話をしては、「そんなものは居ない」「そんな人は見えない」と否定され続けてきた。
なので、幼い頃のぼくは「嘘を言うな」と、かなり怒られた。変なことを言うな、縁起でもないことを喋るなんて、どうしてこんなに性格が悪いんだ。
ぼくは嘘つきじゃない。正直に見えたものを説明している。そうすると、余計に叱られる。
ぼくの見えている景色と、ぼく以外の人が見ている景色は、違う。だから、ぼくは嘘つきになってしまう。
このことに気がついたのは、小学校四年生の時。以来、ぼくは、自分が見た存在について、誰かに話すことを止めた。
だけど、ぼくは気がつくのが遅かった。この頃には、ぼくは学校中の誰もが知っている「嘘つき」少年になっていた。一度、自分についてしまったイメージを、取り除くことは難しい。
そして、悪いイメージを持っている子供は、学校におけるカースト制度の最底辺に位置づけられる。だって「嘘」はいけないことだから。悪いことだから。悪いヤツは、決して人気者と話ができないし、一緒に遊べない。そんなことをしようものなら、身の程知らずとして攻撃されるだろう。世間一般では、人間は皆平等なのだとタテマエを言う。でも、教室の中には、目に見えない、誰も言葉には出さないけれど、身分は確かに存在しているのだ。
嘘つきは悪いヤツだから、一番下の身分。つまり、いじめの対象。
身分が上の人気者とか、運動ができるヤツに、ぼくは肉体的にも精神的にも攻撃された。
苦しいので、先生や両親に訴えてみた。助けてって。
だけど、いじめは止まらない。先生は「嘘つきが悪い」「嘘をつかず、周囲に溶け込める努力をしなさい」と返答するだけ。
両親は、ぼくを「嘘つき」だと思っているので、いじめの訴えを無視した。
「もういい加減にして。あんたの嘘はうんざり。あんたが変なことを言うたびに、近所から笑いものになっているのよ」
ぼくの小学校時代は暗黒だった。中学時代も暗黒だった。同じ小学校出身の生徒が、光の速さで「沙川は嘘つき、虚言癖がある」と噂を流してくれたからだ。スクールカーストに耐える日々。
三年が経過した。受験、そして、迎えた高校入学。
今度こそ、今度こそぼくは、カースト最底辺からの脱出を――。

「見えるのか、なあ？　俺のこと、見えるのか？　見えているんだよな！」
　入学式が終わり、自分の教室に入ると、そこには幽霊がいた。学ランを来た男子生徒の。ヤバい、と慌てて顔を背けるも、かえってその動作が幽霊の気を引いてしまった。
　俺のことが見えるのか、とぼくにまとわりつく。無視しようと努力しているのに、自分は十年前に死んだ、自殺なんだ、いじめのせいで、と勝手にまくし立てる。
　あまりのウザさに、睨みつけて黙らせようとしたら、幽霊の向こう側にいた女子生徒を睨みつける格好になってしまった。
「なに、アイツ。感じが悪い」
　……入学早々、ぼくはスクールカースト最底辺が決定してしまった。誤解させてしまった女子生徒が、すごく可愛いくて人気者な、カーストが上の子だったから。
　どうしてこうなるのか。
「なー、無視するなよー」
　教室内に、ぼくの居場所はない。誰も話しかけてこない。このままだと、いじめが始まるのも時間の問題だ。
「せっかく縁があったんだから。仲良くしよう」
　ぼくは生きている人間だ。どうして幽霊と仲良くしないといけないんだ。
　翌日から、授業中も休み時間中も、ウザく騒ぐ幽霊に、ぼくは筆談で応じることにした。睨むのはダメ。声に出して話しかけたら変な人になる。だから筆談。
　手帳を用意し、幽霊に苦情を申し入れる。
『話しかけるな』
「えー、つまんない」
『ぼくには、ぼくの都合があるんだよ！』
「じゃ、いつなら話しかけていい？」
『ずっと口を閉じていて』
「やだ。せっかく、意思の疎通ができる人間と会えたのに」
『ぼくも嫌だよ！』
　こんな感じで、ぼくは幽霊とコミュニケーションを取ることになった。スクールカースト最底辺ゆえに、学校では友達どころか会話をしてくれる人間さえいない。

　幽霊の名前は吉野信彦。十年前、この学校の生徒だった。死因は自殺。校舎から飛び降りたのだそうだ。自殺の理由は、いじめ。痛い目にあいたくなければ金を出せ、と数人の男子生徒に脅されたものの、差し出せる金がなく、思い悩んで……。
『いじめの過去があるわりに、明るいよね』
　退屈な現代国語の授業中、ぼくは手帳に率直な感想を述べる。
「昔は根暗だったんだよー。けど、こうやって、スクールカーストから離れて教室とか、学校を見てるとさー、俺、バカやっちゃったと反省するよ。何も、死ぬことはなかったよな。逃げれば

よかった」
『学校を？』
「うん」
『けど、今の世の中、ある程度の学歴は必要だ』
　人間、学歴じゃない――そんなのは嘘だ。バカより賢い方がいいに決まっている。学歴がないと就職に不利だし、将来女性とお付き合いするにあたっても、学歴の低い男はそれだけで嫌われる。それなりの学校からそれなりの大学に進学。そして新卒で就職。この流れに乗らないと、カースト最底辺の負け犬としての一生が待っている。
　そりゃあ、なかには学校を中退しても、飛び抜けて頭がよかったり才能があれば、流れに乗らなくても生きていけるかもしれない。けど、頭も顔も平凡人間のぼくに、それができるとは思えない。さらに、ご近所さんや周囲の人間から「いじめにあって学校から逃げた落伍者」とヒソヒソされて、堂々と生きるなんて無理だ。心が折れる。

『どこにも逃げ場なんてないんだよ。ぼくたちに出来ることは、この見えないカースト制度の中で生き延びること』
　逃げちゃダメだ、とはアニメの主人公の言葉だったか。ぼくには、逃げ場がない。
「……どうした、急に暗くなって？」
『嫌なこと思い出しただけだ』
　あのアニメの、鬱々としたエンディングを思い出してしまった。レンタルＤＶＤで見た、旧映画版の方。
　きもちわるい、とヒロインの声が蘇る。カースト最底辺であがくぼくって、端から見たらきもちわるいだろうな……。
「なあ、俺、余計なことを言った？」
　幽霊ーー信彦が不安そうな表情になる。ぼくの顔は、これといって特徴のないお醤油顔だが、信彦はそこそこ整った顔をしている。そのせいで、カースト上位のいじめ加害者から「顔がムカツク」と殴られたそうだ。
『別に』
「ほんとか？」
　せっかくのイケメンが、曇った表情で台無しだ。
「沙川は、生きているのが辛い？」
　唐突に何を言う。
「この教室にいるのが辛いなら、逃げたほうがいいから。逃げたら人生が悪くなると思っているのかもしれないけど、いつまでも辛い思いをして、心が死んで、肉体も死なせちゃったら、人生そのものが無くなるよ？」
　ぼくの高校生生活を、初日から妨害してきたのはお前だ。あの女子生徒に嫌われなければ、もうすこしマシなカーストの位置に……。
　そう考えると、幽霊信彦が恨めしい。こっちが祟ってやりたいくらいだ。
　だけど。
　だけど、信彦は信彦なりに、ぼくを心配してくれているんだろう。
　久しぶりに、誰かから心配してもらえた。
　嘘つき扱いだったから。狼少年のように、ぼくの言葉は信じてもらえない。
　唐突に、本当に突然に、ぼくは生きていけるんじゃないか、と思えた。
　またスクールカーストの最底辺になって、ぼくは落ち込んでいたんだ。
　……ぼくは長きに渡って、そしてこれからも続く、最底辺学校生活に疲れていたんだろう。
　だから嬉しいと感じている。
　たとえ、幽霊からの心配だとしても。
　すくなくとも、信彦はぼくを人間として見てくれる。
　上から目線でバカにしないだろうし、生きる権利を否定するような暴力もないだろう。
　ぼくは手帳に『ありがとう』を書いた。
「え、あ、いや。こっちが変なこと言ったせいだし……」

『お願いがある』
『友達になって』
たぶん、これは一種の逃避行動だろう。
普通の人間は、幽霊と友達になんてならない。生きている人間同士、仲良くなる。
だけど、カースト最底辺のぼくと、友達になってくれるクラスメイトはいないだろう。
これは逃避だ。学校を中退することはできない。身体はどこにも行けない。
だからせめて、心だけは。気持ちだけは、カーストという現実から逃げ出したい。
同士を得ることで、ぼくは絶望の学校生活に立ち向かう。

信彦はびっくりした表情をして、次の瞬間、笑顔になった。

表紙画像は、Pixabayーパブリックドメイン画像からいただきました。

# ぼくたちの逃避行

http://p.booklog.jp/book/65679

著者：招木かざ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/gotoji/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/65679

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/65679

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ